

陳舜臣さんを語る会通信

NO.44

Aug. 2021

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2021年8月15日

「小説家である以上、恋愛も書けないようでは」と奮起して書いた『相思青花』

『相思青花』は、初出、原題は『波の残影』で、1984年6月12日～翌85年6月15日、新潟日報に連載されました。このあたり、集英社(2000年発行)『陳舜臣中国ライブラリー8』所載「恋愛小説と連載小説」陳舜臣VS稲畑耕一郎に、興味深い記述がありますので下に抜粋引用致しました。なお、下枠内、上の画像は講談社文庫版の表紙で、下の画像は、ヒロイン千葉奈美と林輝南が出会ったトプカプ・サライです。

なお、枠内傍線は編集委員の加筆です。

(編集委員 橘雄三)



タイトルを
新聞連載時の『波の残影』から
本にする時、『相思青花』に変更

陳 これは、私には数少ない恋愛小説
説―私自身はそう思っているんです
よ。

「相思」というね、これは恋愛小説
でございまして、頭からタイトルに
もってきてしまって、ちょっと恐れ
多いことだな、という感じはしてい
るんです。でも、こんな漢字にすれ
ば、そんなに生々しくはならないん
じゃないかと。

稲畑 「青花」との結びつきが、語
感として実に相性がいいんですね。

「青花」は、日本という焼きものの
「染付」のことですが、「相思」と
並びますと、華を感じさせますね。

陳 しかし、この小説は最初、ちが
うタイトルだったんです。新聞連載
のときは、『波の残影』というので
した。

似たようなタイトルが、当時発表
された他の作家の作品にありまして
ね。それも、染付のことがテーマだっ

たんです。連載が始まってからそれ
を知りまして、これはまずいな、本
にするときに変えよう、と。

稲畑 でも、「波」というのは、こ
の小説のテーマにかかわる重要なキー
ワードですね。物語を紡いでいる横
糸は、染付の同じ壺と皿、その出処
の謎、それにまつわる人々の数奇な
人生……。それらの青磁に描かれてい
るのが、波の文様。ヒロインの名前
もナミ(奈美)ですしね。

陳 ええ。でも、似たような題名が
他にあるというのは紛らわしいです
からね。ほかにもひとつ、新聞連載
中のを本にするときに変えたのがあ
りましたね。産経新聞に連載した
『天外の花』を『戦国海商伝』にか
えました。

一遍、「恋愛」ものに、
正面から向かい合ってみよう

稲畑 物語の縦糸は、三十代半ばの
神戸に住む美しい未亡人と五十歳に
なったばかりのシンガポール華僑の
実業家とのラブロマンスです。いわ
ば熟年の、おとなの恋愛ですね。そ
れこそ相思の、おたがいの情熱は読
者にひしひしと伝わってきますが、
全体的に品がありますね。作家の人
柄ですか。

陳 恋愛小説を書かせたら、うまい
作家は何人もいますでしょう。とくに
肉欲的な描写なんかは、とても太刀
打ちできない。そういうのは彼らに



トプカプ・サライ 新潟日報連載第1回挿絵

任せて、私は私なりのものを書こう
と思ったんです。

この作品は、たしか私が六十歳前
後のものです。ひと言でいうと、小
説家である以上、恋愛も書けないよ
うでは、と思ったんですよ。

この手のものは自分には苦手だか
ら深入りしない。そういう逃げの
姿勢があった。そういうことを反省
しましてね、やはり一遍、正面から
向かい合ってみよう。

だけど、これは苦労しました。な
んで、こんなに苦しいことをせにや
ならんや、とね。しかし、これを
乗り越えなければ、自分自身が作家
であるという認識がもてない、とい
う感じだったんです。

『相思青花』内容紹介文と主な登場人物

【内容紹介 キャッチコピーより】^あ相い思う男女が結ばれる青花の縁とは？ 緊迫の時に美しく生きる人々を描く長編ロマン。激動の時代の、謎にみちた愛の物語。美しい骨董に秘められた謎を追う傑作長編。一對の壺と皿を発端に、瓶、大陶板と発見されてゆく、一連の青い波濤文の焼物は何？ 大戦のさなか、日中両国に激しく生きた男女の愛の物語を^な縋いませにして、奈美と林輝南の前に明らかになってきた美しい磁器との縁。鮮やかに躍動する波濤文の磁器にまつわる人々の運命。トルコ、中国、神戸、シンガポールを舞台に、民族の叙事詩を背景に人間の運命を世界的なスケールで描く、感動の大河小説。

主な登場人物

● **千葉奈美** 旧姓今川。千葉康夫の妻。実家は生薬の輸入で知られた貿易商。夫の突然の死のあと、イスタンブールのトプカプ・サライ博物館で中国人実業家林輝南と運命的に出会う。

● **千葉康夫** 奈美との十年の結婚生活の後、出張先のロンドンで急死。

● **今川彰造** 奈美の父親。薬学研究のために留学するが絵画に関心を持ち、家業を継いだあと美術品を熱心に収集する。波濤模様の中国磁器をコレクションに持っていた。

● **今川礼子** 奈美の母。

● **鈴木久美** 奈美の長姉。

● **佐藤美美** 奈美の次姉。

● **佐藤輝子** 佐藤家の家付き娘。薬理学者青木輝夫を婿養子に迎える。芙美の姑。上海育ち。井崎大尉、ツリーらと意外な関連をもつ。

● **林輝南(リンフェイナン)** イスタンブールのトプカプ・サライ博物館で千葉奈美に声をかける。神戸育ちのシンガポール在住チャイニーズ。

● **メフメット・エミン** イスタンブールのバザールの骨董品店店主。林輝南とは父親同士の代からの知り合い。日本と深い関わりを持つ。妻、ハル。

● **アーノルド・スミス** ロンドンのハーレイ街に住む医者。ロンドン滞在中の千葉康夫と親交をもつ。波濤模様の中国陶磁器を所有する。スミス夫人の父親ロバート・ノートンは戦時中、中国政

府の顧問を務めた。

● **グリーン** アーノルド・スミスの友人。陶磁器のコレクター。

● **ノブコ** 千葉康夫の愛人。

● **ワン・チー・クワン(王志光)** 戦時中、妻と別れるときに分け合った、ワン家に伝わる波濤文の染付の壺と皿を恩人のロバート・ノートンに託す。

● **井崎大尉** 日本軍の秘密情報部に所属する。紹介されて佐藤家の客となり輝子と知り合う。

● **莫達(ばくたつ)** 太平天国軍が南京を占領した時代の画人。

● **蘭友らんゆう** 莫達の妻。

● **白珠璃(はくしゆり)** 上海に住んでいた佐藤家の隣人白家の親戚の女性。中国音でツリーと呼ばれる。東京の女子専門学校で英文学を専攻。

● **黄亮(こうりょう)** 中国の愛国者。本名は白明和。白珠璃の兄。

● **高山宗治** 吉野の山林王の次男。陸軍士官学校出身の元職業軍人。美術品の鑑識眼はかなりのものといわれる。

● **羽田はねだ(大佐)** 高山宗治が最初に仕えた連隊長。混成旅団長となつて中国九江付近に駐屯する。

● **羽田朋子** 羽田連隊長の長女。

● **北原和也** 京都の骨董品店「春秋館」の店主。メフメットの昔の悪友。

● **三島伴太郎** 江戸時代から続く富豪の生まれ。イギリス留学中に、流出した日本の美術品に接し、美の世界にのめりこむ。美術品を訪ねて日本中を行脚する。林輝南にメフメットを紹介される。

● **村上良子** 証券会社を経営していた村上家の夫人。休沐園に住む。村上家は多くの美術品を収集したといわれる。

● **坂井聡子** 村上良子の姪。林輝南と結婚する。

● **孔淑貞(こうしゅくてい)** 汪兆銘政権の要人孔学章の娘。日中混血児。

ちよつと気になること
トプカプ・サライはアジア側？

■ 作品冒頭、ヒロイン奈美がイスタンブールのトプカプ・サライ博物館を訪れるくだりです。

オスマン・トルコ帝国時代、スルタン(回教王)と称した皇帝の宮殿は、このまちのアジア側にあり、トプカプ・サライと呼ばれていた。いまそこは博物館となっている。

ところで、トプカプ・サライは左の画像のように、金角湾を挟んで新市街が遠望できる小高い丘の上、旧市街の先端部分にあります。新・旧市街、共にヨーロッパ側です。

イスタンブールを熟知されている陳舜臣さんが…。私の思い違い？



www.travelbook.co.jp より

[読書会感想文]

「相思青花」を求めて壮大なジグソーパズル

一葉の会 東広島市 吉川五百枝

恋愛小説に、壮大という言葉は似合わないと思うのですが、恋愛小説だということを忘れさせるくらい時代も場所も規模の大きな小説でした。

陳舜臣は、後の対談で〈恋愛小説を書いてこそ「作家」になる〉と書いています。その続きに、〈恋愛というのは、小説の主要なテーマですからね〉とも語っていますが、人間とはいかなる者かを具体的に把握し表現するには、恋愛小説が最適と作家ならずとも思います。

この作品は、陳舜臣が地理的にも歴史的にも自分の得意な土俵の中で構成しています。トルコのイスタンブールもイギリスのロンドンも出てくるし、中国や日本の地名も重要です。時代は19世紀半ばから現代までの話ですから一人の人の寿命では間に合いません。

これだけの時と場所を集める一点を、作者は「青花」としました。

まず、「青花」(染付)が波濤文の壺と皿として登場し、異なる場所に同じ物が二つある謎を提供します。この謎を知ろうとする女性の行動を追って展開するので、ミステリー小説の要素が濃いとも言えるのですが、その「青花」を製作した思いが「相思青花」という特別な焼物であったことになると、恋愛小説っぽくなりました。それでも、その焼物をめぐる時空の背景は、歴史小説とも言えて、小説の範疇分けはどうしても良くなる大きさです。

陳舜臣は、「莫達」という文人と、その妻「蘭友」との関係を描きます。書物に没頭し、波風を避けてひっそりと暮らしたい夫「莫達」に対して、太平天国の反乱に加わり腐敗した清朝政府を倒したい妻「蘭友」という取り合わせが、「迷橋図」という絵の解説として語られます。書物を持つ男性と剣を持つ女性が橋の両側から歩み寄る図は、革命派の妻と穏健派の夫が、お互いの意思を尊重した結果、一時的に別々の暮らしをしても、やがてまた共に暮らすようになるという暗示でした。愛しているという理由で相手を束縛したがる恋愛感情を抑え、ただ自分の妻への思いを景德鎮の陶工に作らせた磁器に込めるのは、やはり愛のスケールの大きさでしょう。

この「相思青花」と名付けられた磁器達が、縁ある人々の間を廻り、それぞれを結びつけていくものの「相思」の姿をみせていくのを追っていると、登場人物達がだんだんまとまってきました。イスタンブー

ルから始まって、全く関係が解らなくて登場してきた人物が、後半部分では、何本もの糸がつながって、それぞれにジグソーパズルのピースの一つの役割を演じていることを明かしてきます。

記憶や手紙がそろって、登場人物の関係図がみごとに収まりましたが、「相思青花」として作られた皿、壺、瓶、枕が大陶板の中に集められると、「莫達」が「蘭友」のおもかげを留めるために創ったものだったと知らされ、これには驚いてしまいました。

「蘭友」の太平天国にかけた夢が哀しい結果となり、「莫達」は、「相思青花」の焼成後、妻の壊れた夢の結果を隠すべく波濤文を書き入れました。

寄せては返す波の如く、一夜の妻への思いが波頭を作っては次の夜の波に場所を譲り渡す、その繰り返しの別離の間の思いを集めて、妻の哀しい思い出を隠したのでしょうか。焼成後に書き加えられた波濤文様の「青花」がどのようなものだったのか知りたいと思っていましたら、当番さんが、後で書き加えたと言ってもいいほど生き生きとした波濤模様を探しておいてくださいました。

『元・明の青花』(中国の陶磁 8 平凡社)の写真です(左の画像「青花龍文双耳瓶」)。

1850年代の太平天国の時代に焼成され、中国の抗日戦線や第2次世界大戦中の歴史の流れの中で、妻と別れるときに分けられたり、命を救って貰ったお礼にプレゼントされたりと、「莫達」の磁器の行方はばらばらになりました。それがこの作品のミステリアスな味付けとなったのです。

「相思青花」の謎を追い続けた主人公の奈美が、イスタンブールでの出会いから続く林輝南との縁を成就したらしい最終行で、ああ恋愛小説だったのだと落ち着きました。なんというスケールの大きな恋愛小説であることか。

【一葉の会】■呉市中央図書館又は東広島市の順教寺を会場に活動する読書会で、毎月1回開かれています。講師は吉川五百枝先生(ひろしま子どもの読書ネットワーク協議会代表幹事)です。

『相思青花』は同会の2018年6月の課題図書です。

一葉の会のホームページに掲載された、先生並びに会員の方々の感想文のなかから、失礼、僭越ではありますが、吉川先生の感想文を抜粋、再構成してここに使用させていただきました。



陳舜臣さん、新聞連載小説は12本

陳舜臣 VS 稲畑耕一郎
第一面から続く

稲畑 『相思青花』は新聞連載

ですが、連載が終わってから単行本になるまで、二年近くかかっているんですね。原題の『波の残影』で新潟日報の連載が一九八四年六月十二日から翌八五年六月十五日まで。改題して講談社から初刊本が出たのは、八七年二月です。

陳 それは連載したのが新潟日報だけじゃなかったからです。何社かは忘れましたが、他の地方紙も扱ったんですよ。それぞれの新聞社によって、開始の時期にずれがありますからね。トップバッターは新潟日報なんですけど、そこが終わりかけたところに連載を始める社もある。全部が終了するのを待って、やっと単行本になるんです。

地方紙向けに小説とか随筆だとか、文芸ものを専門に流す通信社がありましたね。『相思青花』は学芸通信社でしたが、他に三友社なんかがあります。

作家は通信社から一定の原稿料を受け取り、通信社は各地方紙に売り込んでゆく。だから、通信社にすれば出来るだけ多くの社が飛びついてくるようなテーマとか、書き手がいいんですね。二、三社とればもとはとれるらしい。後は、その儲けです。

地方紙への作品は学芸通信社が多かったね。そこで二十何社に売れたと、これは最高記録です、と言われたことがあります。『夢さめの坂』だったですね。

小説としての新聞連載は、十一本書いたんです。地方紙でも比較的大きなブロック紙が連合した七社会とか、北海道、中日、西日本で固まった三社連合というのがありますからね。

中には二年半も続いた作品もあるし、平均すると連載期間はだいたい一年ですね。

稲畑 雑誌連載のときと、気構えが違うとか？

陳 同じ長丁場といっても、やはり毎日のことですからね。しょっちゅう考えていなきゃいけない、というストレスみたいなのはありますよ。それと、一回が四百字詰め原稿用紙にして三枚でしょう。毎回、それなりのヤマ場を作らなければならぬし、全体の流れも必要になってくる。

■対談の中で陳舜臣さんは、「一番最初は孔雀の道だった。あとは順不同で、相思青花、戦国海商伝、曼陀羅の人、桃花流水、チンギス・ハーンの一族、天球は翔ける、旋風に告げよ、風よ雲よ、夢さめの坂、珊瑚の枕です」とおっしゃっています。対談後に、青山一髪があります。合計12作です。

『波の残影』 新潟日報の連載予告(1984.6.9)

朝刊連載小説「祝婚歌」(平岩弓枝・作、岡本洲一・画)は、十日で完結。休刊日明けの十二日からは、直木賞作家・陳舜臣氏の「波の残影」が登場します。神戸の貿易商で古美術愛好家でもあった亡父のコレクションのナゾを解くために、イスタンブールの博物館を訪ねるヒロインが巻き込まれた、ある大きな事件とは？日本、ヨーロッパ、東南アジアを舞台に、人情の機微と外国情報のみをミステリー・タッチで描く、陳氏ならではの国際色豊かな大ロマンです。挿絵はベテランの横塚繁氏。ご期待ください。



陳 舜臣氏

12日から新連載小説

波の残影

陳 舜臣・作
横塚 繁・画



作者のことは、美しいものに感動したとき、私はそれを創(つく)った人のこと、それを愛した人たちのこと、そしてどのようにして私たちに伝わったかを、自分なりに想像してみる。そんなドラマの原型らしいものが、私の脳裡(のうり)に蓄積(ちくき)されているようだ。それをとり出し、もっと濃い輪郭を与え、時代や国境を越えて通じ合う領域の物語を、たのしく書きたいと思う。新聞小説で現代を舞台にするのは、私にとっては久しぶりのことで、読者の期待に添いたいと願っている。



横塚 繁氏

画家のことは、再びコンビがくめてうれしく思います。小説の画を描くことは、時の流れの中で仕事が出来たのでたのしく、頑張りがいがあります。声援のほどよろしくお願い申し上げます。